

**「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」  
(生徒が主体的に思考するための授業の工夫)**

県立賀茂北高等学校

- 1 学 年 第1学年
- 2 主題名 生きる喜び 3-(3)
- 3 ねらい 勝ち続けてきた短距離走で後輩に敗れてハードルに転向し、その後の陸上人生に喜びを感じている為末選手の生き様を通じて、生きる喜びについて考えを深め、人間として生きることに喜びを見いだそうとする態度を養う。
- 4 資料名 「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」 (出典:「広島県道徳教育指導資料」)
- 5 授業の展開例

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	留意点
導 入	1. 自分の夢は何か ふりかえる。	○自分の夢は何だろう。その実現のためにはどのように努力したらよいだろう。 ○為末選手のオリンピック出場について紹介する。	○事前にアンケートをとっておき、夢について考えさせておく(アンケート結果提示)。 ○紹介の後、読み物資料配布。
展 開	2. 資料の後輩に敗れるまでを読んで、為末選手の短距離走にかける強い思いを考える。  3. 資料後半を読んで為末選手の生きる喜びについて考える。	○後輩に負けた時、どんなことを感じたのだろうか? ・悔しい。 ・ショックだ。 ・全人格を否定された。 ・もうだめかもしれない。  ○ハードルをするにあたって、どんな困難があっただろう? ・身長170cmしかない ・アフリカ人のようなバネはない ・日本人は骨盤が上向きで走るのに不利  ◎どのように考えたから、為末選手は「面白い」と感じたのだろうか? ・世界に挑戦できる喜びを感じたから。 ・与えられた体を、工夫によって世界と戦えるようにするのは楽しいから。	○時間をかけ過ぎないようにする。 ○為末選手の感じていた気持ちに共感させる。  ○ハードル競技に挑戦するにあたって直面する身体的困難に気づきやすくするために、実際にハードルを準備し、視覚的に確認させるようにする。  ○ワークシートにまず個人の考えを書き込ませ、その後、グループ活動を行うことで多様な考えにふれさせ、それを紙にまとめて発表する。 ○発表後、各グループに共通することや新しい気づきについて

展 開	4. 自分の生き方を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の人がやらない考えを開発・実践することの楽しさがあるから。</li> <li>・可能性を自ら見出して挑戦する楽しさがあるから。</li> </ul> <p>○為末選手の生き方と自分の生き方を関わらせて感想を書こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・苦しさを味わった方が、努力して成功した時の喜びが大きくなる。</li> <li>・同じことも、意識の持ち方で、幸福に感じるものだ。</li> <li>・自分も、目標に向かって努力し、幸せになるように生きていきたい。</li> </ul>	<p>て考えさせる。</p> <p>○ワークシートに個人の考えを書かせ、為末選手と自分の生き方に迫るようにする。その際、体育祭や合唱祭、部活動など、苦勞するほど喜びが大きくなっていった体験を想起させることで、自分とのかかわりで考えやすくする。</p> <p>○感想を書きにくい生徒には、事前アンケート結果を踏まえ、声掛けをする。</p>
終 末	5. 為末選手のヘルシンキ世界陸上銅メダルのシーンを見た後、感想を交流する。	○先程の感想を交流しよう。	<p>○多くの困難を乗り越えた喜びを、為末選手の実際の映像をもとに感じられるようにする。</p> <p>○生徒を指名して発表させ、全体で意見交流を行う。</p>

# 活用に生かすための実践報告

県立賀茂北高等学校

## 1 地域や生徒の実態

本校の生徒は東広島市の豊栄町や福富町などの地域から多くの生徒が通学してきている。生徒の状況としては、授業規律が保たれており、授業態度も良好である。しかし、自分から集団をまとめていこうとする生徒が少なく、全体としておとなしい生徒が多い。また、入学から半年を経て、新しい人間関係や進路についての悩みを持ち、教科における学習内容を難しく感じている生徒も多い。生徒が自らの課題についてどのようにとらえ、どのように向き合っていくべきかについて深く考える機会が必要である。

## 2 教材開発及び指導過程の工夫

本資料は、為末選手が自らの挫折や外国人選手と比べての身体的なハンデを乗り越えて、世界大会のメダリストになるという内容である。困難に直面したときにも、前向きに努力することで、その課題に対して目を背けることなく挑戦し続けていることを感じ取れる資料である。

指導にあたっては、自己の考えと他者の考え方を比較する中でお互いを高めあえるように、他の生徒と話し合う場面や全体の中で発表する場面をより多く設定した。また、生徒が考えたことを全員で共有しやすいようにワークシートを活用した。さらに、授業の最後には、為末選手の世界陸上銅メダル決定の動画を用意し、プロジェクターで見せることで、生徒にたくさんの感動・感想を抱かせることができるよう工夫した。

## 3 発問の工夫

導入部分で事前に行った生徒の「夢」や「目標」についてのアンケート結果を提示し、関心を高めて授業の展開に移れるように工夫した。

発問の工夫では、中心となる発問以外は極力少なくし、生徒が中心発問について考える時間

を十分に確保し、グループ交流から全体交流につないだ。また、交流の後、為末選手の生き方と自分の生き方を対比して考えるように生徒に促すことで、生徒が自分とのかかわりの中で考えられるように工夫した。

## 4 生徒の反応（生徒の感想文）

・為末選手は最後まであきらめなかったけど、自分は何かと言いつつ諦めてしまします。諦める＝そこまで一生懸命じゃない、のかなと思いました。しかし、将来の夢は絶対に諦めず、夢を叶えたいと思います。

・後輩に負けて相当ダメージをうけた為末選手は視点を変えることで新しいことにどんどん挑戦していることがすごかったです。

・夢や目標を叶えるために努力をしていた為末選手。私は夢を叶えるために今より更に努力する必要があると思う。夢は諦めるものではなく、叶えていくものだと思う。これから一層努力していきたい。

## 5 成果と課題

生徒が資料を通じて様々な思いを持ち、その思いを話し合いを通じて共有できたことが成果である。また、中心となる発問に対して様々な意見を全体の前で表現できたことも、本校の生徒にとっては貴重な経験となった。

しかし、多くの生徒にとって為末選手は「すごい」選手であると尊敬しているがために、「私にはできない」という自分とは違った次元の人物であるようにとらえている側面もあった。生徒に最も考えさせたい場面での発問内容や指導方法をより工夫し、生徒が自身の課題として具体的にとらえ、より意欲的に思考できるように、指導者側の更なる研鑽が必要である。